



鳥取県教育センターだより

H27年度 第3号

平成27年9月30日 発行

〒680-0941 鳥取市湖山町北5丁目-201 【TEL】 0857-28-2321(代表) 【FAX】 0857-28-8513

【URL】 <http://www.torikyo.ed.jp/kyoiku-c/> 【e-mail】 kyoikucenter@pref.tottori.jp

8/6・7 初任者・新規採用教諭【宿泊研修】

本年度鳥取県の教職員として採用になった初任者・新規採用者153名が、船上山少年自然の家を会場に宿泊研修を行いました。

この研修で、鳥取の豊かな自然のなかで行う集団生活や野外活動をとおして、他者と協働しながら課題を解決していくことの大切さを学びました。

また、主体的に行動するなかにも相手意識を大切にすることにより、よりよいコミュニケーションが図られることを実感できたようです。宿泊研修での学びを今後の学校教育の場での実践に役立ててくれるものと期待しています。



7/27 中学校地理・高等学校地理歴史（地理）研修

専修大学松戸高等学校の泉貴久教諭を講師にお招きし、講義、フィールドワーク（FW）を行いました。国際地理オリンピックなどの世界的な地理教育の潮流を中心とした講義後に、倉吉駅周辺、赤瓦、国道179号線沿いのロードサイドを3班に分かれてFWを行いました。

演習では、FWの結果を基に多角的に検証を行いました。身近な町を教材とし、持続可能な町づくりの実現への戦略をまとめる作業は、新鮮であり、ふるさとを大事に思う心を育む生徒の育成等、学校での実践に役立つヒントとなりました。



この夏、県教育センターでは鳥取県の地域の自然や文化・歴史・人材を活用して、さまざまな研修を実施しました。鳥取県には、素晴らしい地域素材があふれています。



8/18・20・27 初任者研修と10年経験者研修の合同研修

昨年度より初任者と10年経験者との合同研修を実施しています。中学校と高等学校においては「教科指導」をテーマにし、本年度は新たに小学校も「学級経営」をテーマに合同研修を行いました。

初任者が日頃の教科指導・学級経営に関する取組や悩み等を話したり、10年経験者が失敗談やこれまでの経験をもとに秘訣を話したりする等、各グループとも活発な協議がなされていました。

研修後の初任者の表情は、これからの取組への意欲と笑顔にあふれていました。10年経験者は、自分を振り返るきっかけとなり、ミドルリーダーとしての自覚が高まった研修となりました。



研修での先生方の協議も熱かったなあ。

研修企画担当コーナー

8/21 チャレンジ！おもしろ理科観察・実験講座（実習チャレンジ講座②）

網代漁港周辺や大谷海岸沿いで礫や海食地形の観察を行い、日本海形成の歴史や大地の成り立ちのダイナミックな姿に触れることができました。豊かな自然に囲まれた鳥取県ならではの資源活用や授業づくりのヒントをたくさんいただきました。

児童生徒の興味関心を引く身近にある自然の教材に目を向けるとともに、地域の資源を守り、継承する心を育む教育を大切にしていきたいと思えます。



学力向上担当コーナー

学習科学セミナー（高校の先生を対象）

第3回 8/24（午前中のみ小中高合同開催）

第4回 8/25

<シリーズ研修>

「アクティブ・ラーニング」理解と21世紀型スキル育成研修



前回の研修に引き続き、国立教育政策研究所の白水始総括研究官、静岡大学学術の益川弘如准教授を講師とし、下記の内容を演習に取り入れながら研修を行いました。

- ・「21世紀型スキルを育成するアクティブ・ラーニング（以下AL）型授業のポイント」
- ・「学習科学に基づいた授業設計の基本原則」
- ・「授業デザインをどのようにシミュレーションするか」

受講されている先生方には、今回の研修で検討した授業デザイン案をもとに、後期に**授業実践**をお願いしています。

「アクティブ・ラーニング」で意識すべきポイント

- 一人一人が対話を通して納得を積み上げ、自分なりのストーリーをつくることのできる活動を仕組む
→自分なりの納得したストーリーができると、別の場面でも自分の表現で説明できるようになる
- 一人一人が建設的相互作用を
→話し手と聞き手が交代しながら相互に理解を深めることにより、自分なりに納得する解を見出すことができる

<授業デザイン案の検討ポイント>

- 正解到達型の学びで終わるのではなく、正解に到達することで次の問いを生む目標創出型の学びへ
- 子どもはどんな「自分の考え」をもち込むか？
- 活動中に自分の考えや表現を変えられるか？
- 次の問いやゴール、次に使うチャンスを見通せるか？

平成27年度 学びの文化祭 開催

10月29日（木）米子高校 14：45～

11月2日（月）鳥取西高校 12：50～

AL型の授業公開、白水総括研究官、静岡大学の大島教授、益川准教授らによるシンポジウム、分科会などを予定しています。

（詳細については各学校に送付した案内をご覧ください）

ふるって
ご参加ください!!

「小学校におけるタブレット端末活用」研修 7/28

ICT活用教育担当コーナー



新潟大学附属 新潟小学校の片山 敏郎 教諭に講師をお願いし、小学校で子どもたちにどのようにタブレット端末の活用指導をしていけばよいかを学びました。また、演習を通してタブレット端末で資料を作り、発表による言語活動へとつなげる授業を体験し、その有効性を確かめました。



子どもたちにタブレット端末を使わせるときのポイント

- 1.子どもたちは、様々な使い方を考えてくる。その芽をつぶさないように、子どもたちの考えを大切にします。
- 2.子どもたちが、誤った使い方をして失敗をしたときに、どういった点が問題で、どういう使い方がよいのか指導する。

用語：デジタルネイティブ2.0世代

生まれたときから通信機能付きの電子機器が身近にあり、それを使うことが当たり前で全く抵抗がない世代

子どもたちの発想力を伸ばしつつ失敗から学ばせることが、**デジタルネイティブ2.0世代**の情報活用能力を育みます。

コラム

ふるさと

所長 大西泰博

夏の恒例行事がある。日々暮らす集落に昔から伝わる風習で、その名を「墓踊り」という。

文字どおり、初盆を迎えた墓の周りを輪になって踊るわけだが、これが、なかなか珍しいということで、町の無形文化財に指定されている。私も墓の傍らで一役担っており、父親が亡くなる頃から音頭を唄い継いで、もう二十年近くにもなるろうか。墓地が海の見える丘にあるため、踊りの始まる頃には、一面の灯籠と漁火が一続きの光の世界をつくり出す。やはり、珍しいのであろう。この夏には某放送局の取材を受けた。

地元自治会が発行する新聞に、担当ディレクターのコメントが載っていたので紹介したい。

「取材実感を一言で言うと『羨ましい』。墓踊りを今に伝える『甲い合う心』が生きている。それが羨ましいのです。」さらに、「その地に生きる人の価値観までもが貴重な財産」なのだ。

なるほど、日々そこで暮らす者にとっては、あまりに近く、当たり前で意識さえしていないのに、訪問者の視点や声から、ふと「大切なこと」に気づかされることもある。

ふるさと「とつとりの教育」も、日々、そうした人と人とのつながりや「顔の見える」関係が礎となって営まれているのだと思う。唱歌『ふるさと』に歌われるように、子どもたちにとっても「忘れがたき」ふるさとでありたい。そして、「志に灯をともし」ふるさととの教育でありたい。

